

姫島殺人事件

長編推理小説

Kappa Novels



お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただきましたら、ありがたく存じます。なお、「カッパ・ノベルス」にかぎらず、最近、どんな小説を読まれたでしょうか。また、今後、どんな小説をお読みになりたいでしょうか。読みたい作家の名前もお書きくわえていただけませんか。

どの本にも一字でも誤植がないように、つとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば幸せに存じます。

東京都文京区音羽一―一六―六

(〒112-11)

光文社「カッパ・ノベルス」編集部

ひめしま
長編推理小説 姫島殺人事件

1996年8月25日 初版1刷発行

著者	うちだ 康夫
発行者	佐藤 隆三
印刷所	慶昌堂印刷
製本所	ナショナル製本

発行所 東京都文京区音羽1 株式会社 光文社
振替 00160-3-115347
電話 編集部 03(5395)8169
販売部 03(5395)8112
業務部 03(5395)8125

落丁本・乱丁本は業務部へご連絡くだされば、お取替えいたします。
表紙の模様・意匠登録 116613 © Yasuo Uchida 1996

ISBN4-334-07202-X

Printed in Japan

本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

長編推理小説・書下ろし

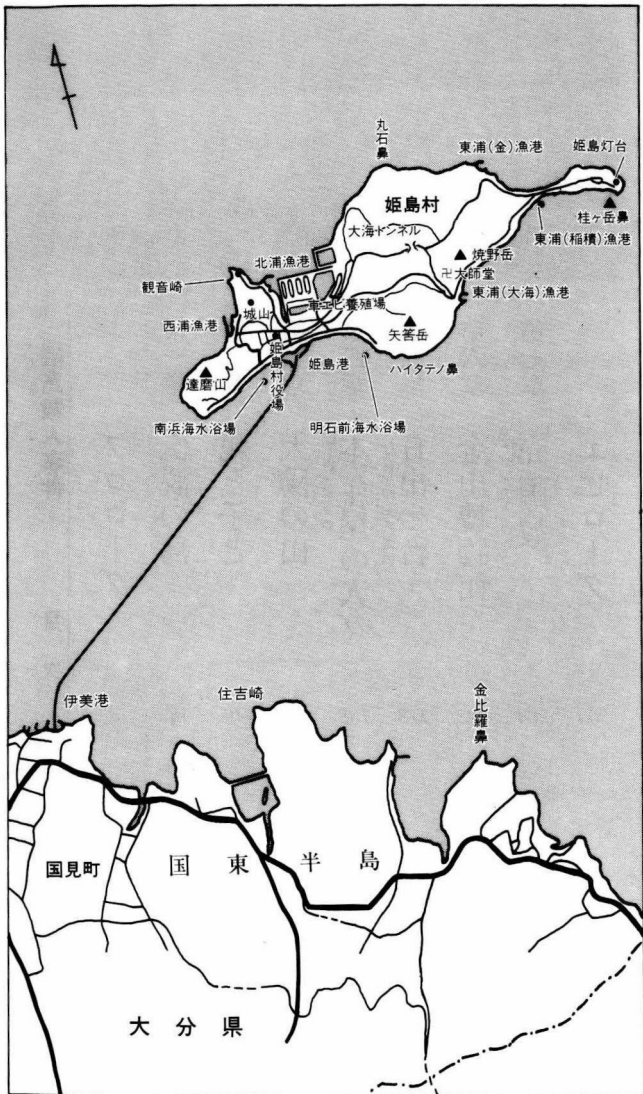
ひめ しま
姫島殺人事件

うち だ やす お
内田康夫



カッパ・ノベルス

第一章	伝説の島	8
第二章	親と子と	49
第三章	太陽の山	89
第四章	本庄屋 <small>ほんしょうや</small> の人々	138
第五章	日出生台 <small>ひじゆうだい</small>	178
第六章	金山博物館	222
第七章	売国奴 <small>ばいこくど</small>	264
	エピローグ	303



プロローグ

オレンジ色のパラソルを、雲ひとつない空に真っ直ぐにさして、若い女が足早に通り返る。海はおだやかに銀色の光を浮かべ、南浦の砂浜は、きょうも焼けつくようだ。

サルスベリが花をいっぱいにつけ、乾いた庭に黒と影を落としている。

水玉模様のワンピースを着た少女が、半分に割ったスイカを抱えて歩く。虫かごを下げた弟が泣きながら、少女のあとを追う。

積み上げたタコ壺の中から、コオロギが髭を出した。その上に架かる干し竿に、頭も足も思いきり広

げられたタコが十連、二十連と、海風に揺れている。新仏の出た家の軒先に提灯が下がった。

ステテコ姿の男が二人、二十本入りのビールケースを下げて路地をやって来る。

酒の肴にと、干しタコを竿のまま下げた男もやって来る。

どこの家でも、どこの路地でも、子供たちは顔を白く塗りたくり、化粧に余念がない。

赤い髭と、はね上げるような目張りを入れた男の子はキツネ、目のふちと額を黒く塗りつぶしたのはタヌキである。

少女たちは舞妓のような髪飾りをつける。襟元まで白粉をはたき、頬にも唇にも紅をさす。そうして日が傾くまでじっと待つ。日が落ちて気温が下がったころ、ひとえの派手な模様の着物をつけ、琉球踊りのような紫の鉢巻と、胸高の帯を締め、白足袋に赤い鼻緒の草履を履いて外に出る。

トウトウトトウと太鼓が鳴りだす。港ではいくつも花火が上がった。

新仏の家から、しのびやかな読経の聲が流れてくる。

盆踊り会場では、汚ならしい勧進坊主の扮装を凝らした男たちの、供養踊りが始まった。誘い出されるように、子供たちが踊りの列に入って行く。

渦巻き模様を染めた日傘に、提灯二つと金の御幣をいくつも下げて、キツネ踊りの少年たちが踊りだす。白装束に白塗りのキツネ面が、暗い空の下でユラユラと踊るのは、少し不気味でもある。

タヌキは茶色のぬいぐるみに、菅笠をかぶり、大福帳と徳利を揺らして登場する。小坊主踊りは鉦と木魚で賑やかだ。ひょうきんなどじょう揃いの子の群れも通る。鳥追い笠をかぶった娘たちのおけさ踊りも行く。腰裏つけた大漁踊りは勇ましい。

島じゅうの家々から、一人残らず繰り出したよう

な踊りの列である。踊りは通りを練り歩き、港の広場で盛り上がる。観光客のカメラが、さかんにフラッシュを焚く。

四日つづきの盆踊りの今夜は二日目。三日前に台風の影響で豪雨が降ったが、それからはずっと晴天に恵まれた。ことしの人出は三万人近いという。ピストン輸送でも、積み残しや乗り遅れの客が出ることもある。港の職員は帰りの混雑を予想して、浮かぬ顔だ。

北浦から西浦、南浦と回り、松原の集落を巡りおえるころになると、そろそろ踊り手たちも疲れてくる。酒の入った仮装の男たちだけが、妙に威勢がいい。大げさな身振りで踊り、走り、立ち止まり、若い娘たちに卑猥な言葉を投げる。

踊りから遠い南浦の浜辺では、恋人たちの密やかな祭りが始まる。潮の流れが緩み、よく風いだ海は足元で静かに波音を奏でる。

月のない暗い夜である。遠い沖から、ゆつくりと近づいてくる物体に、まだ誰も気がついていない。

物体はほとんど水中にある。水面に浮き上がるたびに、ブヨブヨと寒天^{かんてんじょう}状にふやけた皮膚が、防波堤の灯台の光をテラツと映す。もはや暗い穴と化した眼は、遠い宇宙を睨^{にら}んでいる。

第一章 伝説の島

I

全日空大分行きのカウンターの前で、浅見光彦は珍しい男と出会った。浦本智文というフリーのカメラマンで、以前、二度ほど旅行雑誌の取材で同行したことがある。浅見よりはたしか十歳以上は年上で、カメラの腕前のほうは、浅見の目から見ても、単なる商業カメラマンというより、芸術写真といってもよさそうな作品を撮る。

しかし、編集者の話によると、浦本は人付き合い

が下手なのか、仕事には恵まれていないらしい。というよりも、仕事を選びすぎるのが難で、編集者側からいうと、使いにくいタイプなのだそう。

浅見はよほどのことでもないかぎり、政治家の提灯持ちネタでも引き受けるほうだが、浦本は原則として政治家のポートレートは撮らない主義だという。「あんなものを撮るくらいなら、野仏でも撮って歩いていたほうがいい」と言っていた。事実、浅見との仕事のと きも、そういうさり気ない野山の風景写真が多かった。その写真がじつにいい。さり気ないが、決して凡庸ではない。撮影者の心の優しさや温かさが、そのまま被写体に移ったような、しみじみとした情感の漂う写真ばかりだった。

政治家を撮らないのは、何かイデオロギー上の理由かと思っただが、そういうわけではないようだ。「しいて言えば、政治家からお呼びがかからないんだな」と、照れたように笑っていた。

「おたくも大分ですか」

浅見の顔を見ると、浦本は真っ黒に日焼けした顔の中で、目と歯だけを白く見せて、嬉しそうに言った。

「ええ、浦本さんもそうですか」

「ああ、日出生台へ行きます」

「日出生台というと、射爆場問題ですか」

日出生台は大分県玖珠町、九重町、湯布院町の北側にある台地で、耶馬溪溶岩台地の南東部にあたる。明治期に陸軍演習場になって以来、戦後も在日米軍、つづいて陸上自衛隊の演習地として使用されてきた。沖縄の米軍射爆演習場を移転させる先の候補地として、日出生台付近に白羽の矢が立ったことは、浅見も知っている。

「そう……じゃあ、浅見さんも日出生台ですか？」

「いえ、僕は違いますが、そうですか。浦本さん、

相変わらぬいい仕事をしているんですね」

「さあ、いいかどうか……とにかく金にはなりませんがね」

浦本は頬を歪めて笑った。

沖縄に在日米軍基地の七割以上が存在する不条理は、国民の大多数が認めていることだが、さりとて、沖縄から撤去した基地が自分の住む土地や、その近くにやって来るのは願ひ下げにしてみたい——というのも、偽らざる気持ちだ。

とりわけ湯布院は、米軍演習場のあった戦後から朝鮮動乱のころまで、さまざまな不利益を被った。たとえば、七百人を超す売春婦やドル買いの商人が流れ込むなど、教育、文化、環境面で多大な悪影響を受けている。その中から、長い年月をかけて静謐な雰囲気のある温泉郷を作り上げてきた。それが元の本阿弥になりかねないという危機感、地元住民の総意であった。

それをいちがいに地域エゴとのみは言えない。そもそも、原発と基地の問題は、それを必要とするかそうでないかという根本のところから、日本と日本人が直面し、等しく考えなければならぬ大問題なのだ。とくに、基地の問題は安保を保持するかいなかに関わっている。

浦本は飛行機に乗るまでのあいだ、安保無用論を熱心に語った。

「政治家がそうなのはしようがないが、マスコミも国民までもが、沖繩の基地をどこかに移転するのかもしれないのかということばかり話題にして、それ以前の、基地そのものを減らすことに関しては、いっこうに論議しようとしめないのだから、情けなくなる。なぜ最初に安保ありきを前提にするんです？ 東西冷戦が終わって、安保条約もその役目を終えたと思つたが、いっこうに変化する気配がない。少なくとも現在より、在日米軍の基地を縮小してはならない

理由はないはずだ。そういうことを言うと、すぐ、おまえは共産党かどくる。社民党の連中までがそういう言いかねない。こんな問題に共産党もへつたくれもないでしょう。だいいち、ただでさえ狭い日本の土地を、日本人が固有のものとして使えない状況なんて、不条理に決まっている。いったいみんなは何を考えているんだらう」

朝っぱらから硬派の議論を吹っ掛けられて、浅見は面食らつた。それに、浦本の言つた「みんな」の中に、ひよつとすると自分も入つているかと思つと、シユンとならざるをえない。まったく浦本の言つとおりで、浅見だつて沖繩の基地問題は不条理そのものだと思つてはいるが、だからといって、積極的に行動を起こそうという気にはなれないものだ。日本人の大多数が浅見と同じようなスタンスで、傍観者を決め込んでいる。日出生台や岩国、東富士、北海道など、移転候補地に擬せられた地域の人たちにし

ても、自分たちのところに基地がやって来るかもしれないとなつてから、大騒ぎを始めた。

「全日空193便大分行きにご搭乗のお客さまは82番ゲートに……」というアナウンスが、浦本の饒舌をストップさせた。

浦本は例の照れたような苦笑を浮かべて、「どうも、つまらない話をして……」と歩きだした。それからバスで駐機場へ行き、トラップを上がり、機内に入るまで、ひと言も口をきかなかつた。浦本は前方、浅見は後ろのほうの座席で、別れ際にはじめて「浅見さんは大分のどこへ？」と訊いた。

「姫島です、国東半島の沖合の」
「ほう、姫島ですか、あそこはいいが、しかし浅見さんが姫島へ行くとなると……」

何か言いたそうだったが、乗客の列が背後につかえているので、浅見は「じゃあ」と手を上げて遠ざかった。

飛行機嫌いの浅見にも、快適そのもののようなフライトであった。大分空港は快晴の空の下で、滑走路に陽炎が立っていた。まだ七月になつたばかりだが、もう梅雨は明けたのか、降り注ぐ陽光は完全に夏のものだ。

飛行機を出たとき、廊下に行く列の先のほうに、浦本の特徴のある登山帽が揺れているのが見えた。さつき、何かを言いかけたのが気になつていたので、ロビーで待つていてくれるのかな——と、いくぶん期待したのだが、浅見が玄関近くに辿り着いたときは、浦本はすでに外に出て、タクシー乗場の先で迎えるの車に乗り込むところだった。四輪駆動のランドクルーザータイプ車で、カーキ色のジャンパー姿の男が、浦本に寄り添うようにして車内に消えるとすく、青い煙を残して走り去つた。

日出生台は大分空港から南へ、別府方向へ行くのだが、浅見の乗ったタクシーは、国東半島の東海岸

沿いに北へ向かった。国東町を経て、およそ四十分で国東半島の北端、国見町に着く。

「国東」の地名の由来は、景行天皇が熊襲征伐のために九州に渡るとき、船上から陸地を眺め、「あれは国の崎か」と言ったことによる——と『豊後風土記』にある。また、その記述の中に、同じ景行天皇がこの地方を訪れたさいの述懐として「国見村」という地名が見えるので、奈良時代から、すでに「国見」は認知されていたことになる。もともと、『豊後風土記』が編纂されたころは、「国見村」に該当する地域は「伊美郷」と通称されていて、中世以降も「国見村」という名称は存在しない。近代において、「国見」が公式な地名となったのは、一九五五年に東国東郡の伊美町と熊毛村とが合併して国見町が成立した以降のことである。

その国見町の伊美港から姫島まで、小型のフェリーが通う。姫島村営で、およそ一時間に一便程度の

頻度で往復している。島の住人にとっては、バス感覚で利用できるのだろう。小さな漁港のような岸壁に、安芸の宮島へ渡るのよりやや大きい程度のフェリーが接岸して、車が二台と、地元の人らしい乗客ばかり三十人ほどがのんびり降りてきた。観光客の姿はあまり目につかない。大学はもう夏休みに入っただと思うが、観光シーズンにはまだ早いのかもかもしれない。

降りたのとはほぼ同じ人数の客が乗船した。車の利用はない。乗降客同士、すれ違いざまに挨拶や無駄話を交わしているところを見ると、ほとんどが顔なじみらしい。

全国どこへ旅しても、浅見は土地の人たちの会話を聞くのが好きだ。それもなるべく、詭りのきつい言葉でやってもらいたい。「エビはどげか」「まだわりいようやなあ」などと、深刻そうに話すのを聞くと、そのことだけで、現在の島の生活の状況が見え

てくるような気がする。

姫島は日本の総生産量の約一割を占める車エビの養殖地として知られている。浅見の姫島取材の目的のメインは、その車エビであった。地図の上で見ただけでも、ずいぶんちっぽけな姫島が、なぜ全国一の車エビ産地になりえたのか、その秘密を、「地方の時代」のひとつのケーススタディとしてルポにまとめるという狙いだ。

港内はさざ波ひとつないようなベタ風だったが、防波堤を出はざれるとけっこう白波が立っていた。

この辺りは周防灘で、国東半島の突端と姫島に挟まれた海峡付近は潮の流れが速いところだ。しかし、フェリーは揺れを感じる間もなく、わずか二十分ばかりで姫島に着いた。

姫島は東西が七キロ、南北が四キロ、周囲十七キロ、面積、六・七五平方キロ、人口は三千人と少し——とガイドブックには書いてある。海から見ると、

平たい陸地の上に四つの突起のような山がある。もっとも高い矢筈岳でも、標高は二六七メートルだが、これらの山はすべて火山だそうだ。

港には舢舨のような小型漁船が数隻、もやつてあって、岸壁では網の手入れをする老人が三人、何か卑猥な話でもするのか、齒茎を剥き出して高笑いをしている。昼下がりののどかな港風景であった。船の客は三々五々散って行って、駐車場のある港の広場はたちまち閑散とした。

港の案内所で聞いて、まっすぐ「松原」という集落の中に入って行った。小さな商店や旅館、民宿などが散在するほかは、ごく鄙びた漁村のような佇いであった。

車エビの養殖場は、港とは反対側の島の北側にある。姫島を上空から見ると、中央よりやや西に寄った辺りで極端にくびれた、ひょうたん形をしている。そのもっともくびれたところが松原で、そこを中心

とした北側の入江一帯に養殖場が展開している。港からほんの十分ほど歩くと北の海岸に出て、養殖場に臨むことができた。

広大な養殖場を見渡す位置に、養殖会社の事務所がある。二階建てのさほど大きくはないが清潔そうなオフィスだ。あらかじめ電話でアポイントを取ってあったので、すぐに応接室に案内され、中条という所長が応対した。六十歳近いのだろうか。動物を飼育していると、だんだんその動物に似てくるというが、中条の痩せ型で眼鏡をかけた感じが、どことなくエビに似ている。

もともと技術畑からこの仕事に就いたというだけあって、説明は懇切丁寧で、姫島における養殖事業の沿革がよく分かった。

中条所長の話によると、もともと、この入江は遠浅の干潟のような地形だったところで、その特徴を利用して、古くから塩田事業が行なわれていたのだ

そうだ。慶長年間に塩田の記録があるというから、相当に古い。それ以来、長きにわたり、姫島の経済は塩田によって支えられてきたといってもいいのだが、イオン交換技術の発明によって精製塩の生産が普及すると、旧来の方法は経済的に成り立たなくなつて、昭和三十四年に至り、塩田は廃止された。瀬戸内の赤穂をはじめ、三州吉良など、日本じゅうの塩田がほぼ同時期に廃業している。

最大の現金収入の道を失った姫島村は、途方にくれた。その窮状を救うために考え出されたのが車エビの養殖である。遠浅の地形を利用した塩田は、車エビ養殖池に転換するには、まさにうってつけと思われた。

最初の車エビ養殖会社は昭和三十五年に設立されたが、三年かかっても思わしい結果が出せないまま、昭和三十八年に撤退し、その後を瀬戸内海水産開発という会社が受け継ぐことになった。この会社が姫